花嫁調教

恥辱の披露宴

岡下誠
挿絵／猫丸

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION

Contents

目次

第一章　婚約者のために……4
第二章　花嫁の純潔保持……59
第三章　婚礼衣装の試着……118
第四章　華燭の典……177
第五章　恥辱の披露宴……231

登場人物 *Characters*

石神井 沙織
(しゃくじい さおり)

結婚を控える地方銀行勤務の二十八歳。真面目で大人しい性格。豊かな乳房を始めとした肉感的な肢体を持つが、男性の注目を浴びてしまうため疎ましく思っている。

中川 貴英
(なかがわ たかひで)

沙織が勤務する銀行の頭取。五十代半ばながら、がっちりとした体躯で精気が満ちている。

板橋 実
(いたばし みのる)

沙織と同じ銀行に勤務する婚約者。柔和な容姿、性格の三十二歳。

特に、陰核をずり上げられた時の快楽は、性にうとい沙織の予想をはるかに上まわっていた。めくるめく愉悦が一瞬にして全身を駆けめぐり、腰が砕けそうになる。女肉穴は物欲しそうにひくひくと収縮し、熱い蜜汁をどろりと滴らせた。

（嫌なのに……いやなのに、あそこが……んあ、あぁぁ、あん……）

凌辱から逃れようとして腰をうねらせているのに、その動きが原因となって快楽を味わわされてしまうのだ。亀頭をかわそうとすればするほど官能をかき立てられ、沙織は深い絶望感に打ちのめされた。

それでもあらがい続けているのは、強固な貞操観念ゆえである。

だが、大股開きで股間をうねり舞わせている仕草は、沙織の意思がどうであれ、男の逸物をねだっているように見えてしまう。

「そんなに腰を揺すって、沙織くんも私のものが欲しいのではないのかね？」

沙織の思いとは裏腹に濡れ潤んでしまった女陰花を、醜く肥大した亀頭で執拗につつかれる。ねっとりとこすり上げられる。

「欲しがってなんか……んっ、あひっ、んあぁぁ……」

蜜に濡れた姫花弁の間をまさぐられ、包皮から剥け出た陰核を亀頭の縫い目ですりつぶされ、沙織はいいようによがり啼かされてしまう。

快楽は腰の芯にまで響き渡り、下半身へ力を入れていられなくなる。官能の脱力に見舞われて、いつしか身をよじることさえままならなくなっていた。

「若い板橋くんにはかなわないかもしれないが、私の逸物を味わってくれたまえ」

しどけなく濡れほころんでいる女陰門へ、丸々とふくらんだ亀頭をあらためて押しあてがわれた。間髪を容れずに打ち込まれる。

張り出しのきいた亀頭によって、女肉穴をえぐり分けられた。

ぬぶっ、ずぬぬぬぬぬ……。

すぼまった膣穴を押し広げられ、奥の奥まで突き上げられる。

猛烈な拡張感が吹き荒れるとともに、激しい快楽が奏でられる。

「あひっ、んひいいいいいっ」

大股開きを強いられた女体はびくんとのけ反り、細かに引きつっていた。肌色のストッキングを穿いた美脚は、ショーツを太腿の付け根に絡みつかせたまま、足先をひくひくと蹴り上げている。女肉穴の最奥まで一撃でえぐり上げられ、気が遠くなるほどの官能を響かされたのだ。

（ああぁ……わたし、とうとう……。実さん……ごめんなさい……）

沙織は悲嘆に暮れている。打ちひしがれて、ぐったりとなっている。

婚約者にしか許してはいけない女肉穴へ、あろうことか他の男の肉柱を打ち込まれてしまったのだ。婚約者のためを思って取り引きに応じたとはいえ、また、最後にはできる限りの抵抗をしたとはいえ、頭取のもので姦通されてしまったのである。

「どうかな、沙織くん。私の逸物の具合は？」

「そ、そんなこと……知りません……」

きつくまぶたを閉ざして顔を背ける。

だが、視界を遮断したことによって、女肉穴へ打ち込まれたものの存在感がより鮮明に迫ってきた。頭取の男性器は圧倒的なまでに太くたくましい。見ただけでも大きいと思っていたが、こうして実際に打ち込まれてみると、肉胴の長大さや野太さをまざまざと思い知らされる。そこに帯びている熱や、脈動の力強さまでが、婚約者のものを凌駕しているように思えた。

（実さんのよりもずっと太くて……ああぁ、あそこが裂けてしまいそう……）

婚約者のものでは味わわされたことのない拡張感が女肉穴を責めさいなんでいた。これでもかというくらいに押し広げられた女肉穴は、苦しそうにひくひくと引きつっている。自分でも気づかないうちに唇が半開きになっているのは、いっぱいに押し広げられた膣穴と呼応しているからであろうか。

亀頭の張り出し具合も際立っており、膣穴の奥深くで裾野の広がりを感じさせられている。わずかに身じろぎしただけで、笠にこすられる感覚を味わわされた。

「板橋くんのものとくらべてどうかな？」

婚約者の名前を聞かされて、こらえがたい罪悪感に灼かれた。

「お願いですからっ、お願いですから抜いてくださいっ！」

半ば狂ったようになって身をもがかせる。腰をよじる。

しかし、股間の中心部には太くたくましい男性器が打ち込まれていた。五十代という年齢を感じさせないほど強靱なそれは、肉の杭となって沙織の女体を刺し貫いている。言うなれば、男性器という肉杭によって磔にされているのだ。

「んあぁぁ、あひっ、ひいいっ、ああん……」

肉感的な肢体をくねらせ、大股開きの股間をうねらせるのに合わせて、沙織はふしだらなよがり啼きを上げていた。どんなにもがこうとも、強ばりきった肉柱は全く動じない。それどころか、もがけばもがくほど女肉穴を深々とえぐりまわされて、官能をかき立てられてしまう。扇情的な半裸に剥かれた女体はびくんと反り返り、性の喜びにわなないていた。拡張を強いられた女肉穴からは蜜汁がもれ滴っている。

（ひいいっ、んあぁ……あそこが、かきまわされてぇぇっ）

女陰門へ亀頭をあてがわれた時も、身をくねらせればくねらせるほど秘めやかな粘膜を摩擦されて、快楽を味わわされてしまった。そして今、男の象徴から逃れようとして女体をよじればよじるほど、強靱な肉杭で女肉穴をえぐりまわされている。女の喜びは腰の芯にまで響き、あらがう力は次第に奪われていった。男性器のたくましさを実感させられるとともに、それで磔にされた身であることを思い知らされる。

「ほほう。腰をくねらせるほどによいのか」

あらがえばあらがうほど官能の深みにはまってゆく美人女子行員を、頭取は満足げな笑みを浮かべながら見下ろしていた。

「ち、違いますっ……。わたし……感じてなんか……んああ、ひっ、んひいいっ」

あらん限りの腕力を振り絞って、頭取の胸を押しのけようとする。

腰をうねりまわして、そこに打ち込まれた男性器から逃れようとする。

たとえ無駄だとわかっていても、潔癖な性格の沙織は身をよじらずにはいられない。

（ああぁ……んはぁぁ……。あそこが気持ちよくて、腰に……力が……）

婚約者への罪悪感から懸命になって女体を暴れさせているのだが、肉の杭となった男性器に女肉穴を強くかきまわされて、否応なしに快楽をかき立てられた。

頭取の身体を押しのけようとしている腕は、次第に力を失ってゆく。

右に左にとよじられていた女体は徐々に大人しくなってゆき、終いにはわずかながら背を反らせるだけになっていた。初めのうちこそ嫌悪感に歪んでいた顔は、今や、どこか切なげで憂いが匂い立つ表情をしている。

「恥ずかしがることはないんだよ。沙織くんは女盛りの二十八歳だ。婚約者以外の逸物によがらされてしまったとしても、仕方のないことなんだから」

「わ、わたしは……そんなふしだらな女ではありません……」

「本当にそうかな?」

頭取は、いたぶるようにして二度三度と腰をつかった。

牡の欲望にみなぎる男性器で、濡れ潤んだ女肉穴をえぐり上げる。

「んううっ、んくうっ、あぁぁ……あんっ……」

沙織は懸命になって唇を結び、ふしだらな声をもらすまいとした。しかし、たくましい肉杭でごく軽く突かれただけで、たちまちにして唇がほどけてしまう。

張り出しのきいた亀頭で膣の秘粘膜をこすり広げられると、めくるめく歓喜の音色が奏でられた。ほんのわずかな摩擦でさえ、激しい快楽となって響き渡る。

(どうしてなの……? 嫌なのに……あそこが気持ちいいの……)

沙織は深く恥じ入っていた。

婚約者のものでなくても感じてしまう自分に。
いや、むしろ婚約者のものよりも感じてしまう自分に。
頭取の男性器は、婚約者のそれとくらべてかなり大きい。しかも、亀頭の笠は大きく張り出していて、抜き差しのたびに膣粘膜をかきこすっている。巨躯を誇る男性器は沙織の女肉穴をいつも以上に押し広げており、婚約者のものでは感じたことのない摩擦を与えていた。成熟しきった女体は、これまで以上の拡張と摩擦とを味わわされて、女の喜びを貪ってしまう。
（実さんのより……気持ちよくなってしまうなんて……）
罪の意識に懊悩している沙織。
清楚可憐な美貌は、官能の喜びに上気しつつも、憂愁の表情を浮かべている。
「板橋くんのことを思ってこらえているんだろうが、そういう姿を見せられると、ますますよがり啼かせたくなってしまうよ」
頭取は卑猥な微笑に唇を歪めながら、腰づかいを荒らげていった。隆々とそそり立った男性器を繰り出して、濡れそぼった女肉穴をえぐり上げる。かきまわす。
ぬっぺりと肥大した亀頭で膣粘膜をこすり抜き、喜悦の旋律を響かせる。
「んんっ、んうぅっ……んあぁっ、ああん……」

官能美に恵まれた肢体がのけ反り、たわわに実った乳房が揺れ弾む。
婚約者の名前を聞かされるたびに沙織は、感じてはならないと自らに言い聞かせてきた。成熟した肉体は官能に溺れかけているが、せめて恥ずかしい声だけは出すまいとして、半開きになった唇をきつく結び直す。
だが、唇を結んでいられたのは、ほんのわずかの間でしかない。たくましい肉柱で一撃、また一撃と打ち抜かれてゆくうちに、結んでいたはずの唇は徐々にほどけてしまう。裾広がりの亀頭でこすり上げられるごとに激しい快楽を奏でられて、ゆるんだ唇からふしだらな声をほとばしらせてしまう。
「はあぁ、んあっ、あん……んあぁん……」
婚約者と過ごす夜にしか発してはならないはずの声。そればかりでなく、婚約者にすら聞かせたことのない声を、他の男の肉柱で上げさせられてしまった。
淫らな泣き声を発しているのは唇だけではない。鬱蒼たる陰毛の中に息づく唇も、ふしだら極まる濡れ音をさせている。
ぢゅぷ……ちゅく……にちゅぷ……ぢゅぷんっ……。
しとどに濡れ乱れた膣肉穴を男性器でかきまわされて、小さな泣き声となっていた。
「こうすればもっとよくなるよ」

打ち込みに合わせて揺れ弾んでいる豊乳を、頭取の手で鷲づかみにされる。手のひらいっぱいに揉みしだかれたかと思うと、頂の乳首を摘み転がされた。
「ああっ、んあぁぁ……。乳首……許してくださいっ……はうっ、ああん……」
元々から大きめの乳首は、官能の興奮に見舞われて、ぴんぴんに勃起している。はち切れるばかりにふくらんだ蕾が身をもたげている様は、愛撫をおねだりしているようにしか見えない。勃起して感じやすくなった肉突起を手荒に揉み転がされて、勢いよく快楽が噴き上がっている。
（いいっ……乳首が気持ちいいのぉ……お乳が出そうなのぉぉ……）
ぷっくりとふくらんだ乳首を転がされ、搾乳でもするかのように摘みしごかれて、沙織はあられもなくよがり悶えていた。
「乳首でこんなによがっていたら、こっちをいじられたら悶え狂ってしまうよ」
頭取の右手が下腹部へと這い下りてきて、剥き身の陰核を指腹でとらえられる。
沙織の女芯は、婚約者のものよりも巨大な男性器に興奮したのか、浅ましいまでに勃起していた。乳首と同じく大きめの肉粒はいっぱいに身をふくらませて、恥ずかしげもなく包皮から剥け出ている。
それを、荒々しい腰づかいに合わせて揉みこねられたのだ。

「そ、それは……」
婚約者と夜をともにしたいのは沙織とて同じだ。
（ああぁ……実さん……。私も実さんに抱かれたいの……）
これまで性に関しては『求められたら身体を許す』という受け身の姿勢であったが、今夜に限っては別だ。肉体に欲求不満がわだかまっていることとも相まって、心の底から婚約者に抱かれたいと思っていた。
しかし……その願望は叶わない。
下穿きを着けているべき股間は、ステンレス製の貞操帯で封印されているのだ。
「急な仕事で頭取から呼び出されているの……」
これほどまでに執拗な張形の振動は、呼び出しの合図に違いない。
「そうなんだ……。残念だな……」
落胆の顔つきをしている板橋だが、沙織の言葉を疑っている様子は全くない。
そのことが沙織をさらに苦しめる。
「遅くなるかもしれないけれど、仕事が終わったら実さんの部屋に行くから……」
「楽しみに待っているよ」
婚約者のやさしい笑顔に、ますます罪悪感をかき立てられる。

板橋と別れた後に、沙織は携帯電話を開いた。
そこには、案の定、呼び出しを命じる頭取からのメールが来ていた。

「その様子だと、板橋くんと会っていたのかな？」
沙織が呼び出されたのは高級ホテルの一室。
頭取は、銀行にいた時と同じ服装でベッドに腰かけている。ゆったりと脚を広げており、スラックスの股間部分は張り裂けるばかりにふくらんでいた。
「もしかして、板橋くんの前で気をやってしまったのかな？」
「そ、そんなことはありません……」
立ったままの沙織は、美脚をよじり合わせて太腿同士をすりつけている。もじもじとして落ち着かないその仕草は、尿意をこらえているようにも見えた。
しかし彼女がこらえているのは排尿欲求などではない。牝の欲望である。
（おぞましい器具に感じてしまうなんて……私、どうかしているわ……）
愛しい婚約者に抱かれたいという想いがある一方で、成熟した女体はとにもかくにも牝欲のわだかまりを発散させて欲しいと訴えていた。こすり合わせている太腿の付け根は、ふしだらな粘液でぬらぬらになっている。

「お願いですから……貞操帯を脱がせてください……」
今夜は、板橋の部屋でともに過ごしたい。彼に抱かれたい。
そのためには、どうしても貞操帯を脱がせてもらわなければならい。
「脱がせてやってもいいが、それは沙織くんの態度次第だよ」
にやにやと笑みを浮かべながら、頭取は股間をせり出させた。
「私のものを、舌で慰めてもらおうか」
「そ、そんなこと……できません……」
沙織は顔を背ける。何かしら淫らな要求をされることは覚悟していたものの、いざ要求を突きつけられると生理的な拒否反応の方が先に立ってしまう。
「それならばそれでかまわんよ。すぐにでも内部調査を開始させよう。貞操帯の鍵は板橋くんに渡しておくから、彼に外してもらうといい」
「や、やめてくださいっ……。それだけは許してください……」
たたみかけるような脅しに屈服して沙織はひざまずいた。
「します……。いたしますから……」
顔を背け気味にしつつ、わななく手を頭取の股間へとやる。
（許して、実さん……。あなたに抱かれる前なのに、こんなことをして……）

布地が裂けるほどにふくらんでいる股間へ、ためらいがちに指先を触れさせた。
「ひいっ……」
沙織の女体はびくんと引きつる。
さながら、高圧の電流に打たれたかのようだ。
（とっても硬い……）
スラックスにできたふくらみは、その奥に鋼の棍棒があるのかと錯覚させられるほどに強ばりきっていた。布地を隔ててさえ熱さが伝わってくる。牡の欲望にたぎって荒々しくのたうちまわっているのが、布地越しにですら感じられる。
これまでの沙織だったら、弾かれたように手を引っ込めていたかもしれない。
だが、悶々とした欲求不満に囚われた今、股間の強ばりを無意識のうちに撫でさすっていた。男の欲望に反応して身体が火照ってくる。ブラジャーの内側では、いつの間にか乳首がぴんぴんに尖り立っていた。貞操帯の奥では、ひとりでに陰核が勃起している。昨日から慢性的に半勃起状態だったが、男の強ばりに触れた途端、いっぱいに身をふくらませたのだ。張形を深々とくわえ込んだままの女肉穴も、物欲しそうに収縮しながら、新たな蜜汁を滴らせている。
「し、失礼いたします……」

かすかに息づかいを乱しつつ、ゆっくりとファスナーを下ろした。わななく指先をトランクスの中に差し込み、がちがちに強ばりきった男性器をつまむ。
(はあぁぁぁ……。熱くて……びくびく跳ねている……)
直に触れると、熱く湧きたぎった牡欲が奔流となって女体内に流れ込んできた。
男の象徴に触れただけで、乳首も陰核も細かに脈打ってしまう。
苦労して引きずり出したそれは、天を衝くかのように隆々とそびえ立っていた。野太い肉胴を反り返らせ、ぬっぺりとして裾広がりの亀頭を粘液にぬめ光らせている。
(す、すごいわ……)
思わず目を見開いていた。目をそらしたいのだができない。醜悪な姿をしていながら女の本能へ訴えかけてくる肉柱に、沙織は魅入られてしまったのだ。
ひざまずいた姿勢のまま、太腿同士をもじもじとこすり合わせる。
「頭取という重責を担っているとストレスが溜まってね。夜になると逸物が言うことを聞いてくれないんだよ」
沙織は、男性器の根本へ両手をうやうやしく添えた。
(こんなこと、実さんにだって一度しかしたことがないのに……)
嫌悪感と陶酔との入り混じったような顔つきで、恐る恐る亀頭へ唇を寄せる。

そこから立ち上る生臭い匂いについても、嫌悪の情とともに、なぜか妖しい高揚感を覚えてしまう。牡の臭気に、女の本能を刺激されたのかもしれない。
粘液にぬめってまがまがしい形相をした肉瘤へ、まぶたを伏せつつ口づけする。
「んうぅ……」
粘膜と粘膜とが触れ合った瞬間、官能の電流が走った。
男の象徴に帯電している牡欲が、手で触れた時以上に女体内へ流入してくる。恥ずかしげもなく尖り立った乳首と女芯は、牝欲に悶えてぴくぴくと脈動していた。
(実さんにした時には、こんな風にならなかったのに……どうして……?)
おのれの肉体反応を恥じながら、醜く肥大した亀頭の頭頂部へ繰り返し口づけする。右手で肉胴をしごき上げつつ半開きの唇を被せ、ついばむように吸いしごいた。
「んっ、んんっ……んうぅ……」
鼻にかかった小さな呻きをもらしながら、肉瘤の頂にある鈴割れをついばんだ。わずかに舌を出して、舐めたりつついたりする。
「そんな舌づかいでは大の男を満足させられないぞ」
足元にひざまずく秘書を、頭取は傲然と見下ろしていた。
「板橋くんにもそんなつたないフェラチオをしているのかね?」

軽く腰をつかって沙織の唇を突き上げる。
「んっ、んうぅ……。実さんのことは……言わないでください……」
「ちょうどよい。板橋くんのためにも、私がフェラチオのやり方を教えてあげよう」
貞操帯の裏側に生えた張形が微弱な振動を始めた。
「あぁっ……。そんなにあそこを責められたら……んあぁぁ……」
ひざまずいたために後ろへ突き出された尻肉が、悩ましくうねり舞う。
「亀頭全体をくわえ込んでから、唇でむしゃぶりしごくんだ」
命じられるがままに肉瘤の根本まで口内へ受け入れ、唇で吸いしごいた。
「もっと心を込めて」
微弱にふるえていた張形が、いきなり荒々しく暴れだす。
「あひっ、ああんっ……」
欲求不満が渦巻く女肉穴を力強い振動で責められ、思わずのけ反ってしまった。
「唇を離すんじゃない。根本に添えた両手も絶対に離すなよ」
お仕置きだとでも言わんばかりに、強振動と弱振動とを交互に与えられる。
「んあぁ……も、申し訳ありません……んっ、ああぁっ……」
弱から強へと振動が跳ね上がるたびに、ふしだらな呻きをもらしてしまう。

沙織は、張形という名の鞭で調教されているのだ。
「舌も使うんだ。全体を舐めまわすようにして」
「は、はい……」
ぬめ光る亀頭に舌を押し当て、ゆっくりと舐めまわす。張り出した裾野から、鈴割れの刻まれた頂まで、ねっとりと舐め上げた。頭取からの指示に従って、張り出しの裏側までも舌先でなぞりまわす。
初めのうちこそぎこちない舌づかいだったが、何度か繰り返すうちに動きがなめらかになってきた。男根の根本へ両手を添え、黒髪を揺らめかせながら吸引する。
ちゅぷ……にちゅ……ちゅぷぷ……。
唇で吸いしごくたびに小さな濡れ音がした。
はしたない唾液音をさせていることに恥ずかしさを覚えつつも、沙織は醜悪な肉瘤に舌と唇とを捧げている。自分では気づかないが、陶酔の表情になりつつあった。
「なかなかの上達ぶりだ。褒美をやろう」
にやにやと笑いながら頭取はリモコンを操作した。
「んあぁ……ああん……。そ、そこは……」
陰核をとらえていた突起が細かに振動し始める。

絶頂寸前でのお預けを繰り返されてきたため、女陰に息づく秘蕾は包皮が被さる暇さえなく勃起し続けてきた。嬉し泣きしている女肉穴を羨んでいた陰核は、待ち望んでいたものをいきなり与えられて驚喜する。

（いいっ、気持ちいい……腰がとろけそうなのぉ……）

下半身全体が官能の脱力に見舞われ、ひざまずいていることさえおぼつかない。たくましい肉柱に両手ですがりついて、ようやく身体を支えているという感じだ。

タイトスカートに包まれた美尻は、ひとりでにうねり舞ってしまう。貞操帯に囚われた女陰はますます嬉し泣きをし、ついには太腿の内側を蜜涙が伝い落ちた。

「胸も使いたまえ。沙織くんは胸が豊かだから、使わないともったいないよ」

婚約者にすらそのように破廉恥な奉仕をしたことはない。

しかし、自分でも驚くくらいに抵抗感がなかった。貞操帯で焦らし抜かれたために、二十八歳の心と身体が牝に目覚めてしまったのかもしれない。

（ごめんなさい、実さん……。あなたが知らないところで、こんなことを……）

亀頭にむしゃぶりついたままブラウスの胸元をはだけ、ブラジャーの肩紐を片方ずつずり下ろした。こぼれ出た豊乳を左右の手ですくい上げ、勃起男根を挟み込む。

隆々とそびえ立つ肉柱を、たわわに実った乳房で揉みしごいた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

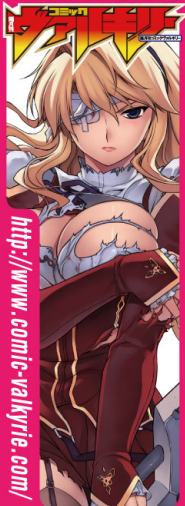
※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ！
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ！
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利！
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中！



http://www.comic-valkyrie.com/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌！　18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

http://www.cran-berry.com/

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出！　新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

http://www.mille-feuille.jp/

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム！「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場！

http://www.2d-dream.jp/

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める！携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ！